

異種混交の庭が表象するもの

—ラパチャーニの庭とホーソーンの人種意識—*

大野美砂

本稿は、ナサニエル・ホーソーンの短編小説「ラパチャーニの娘」(1844)の中に、白人作家ホーソーンが持っていた、異人種に対する複雑な感情を読み取ることが目的とする。ホーソーンが作品において、人種に関するテーマを直接扱うことはひじょうに少ない。しかし、彼が創作活動をした時代の社会状況、伝記、*American Notebooks*の記録などを見ると、彼が人種をめぐる問題に無関心であったはずがないように思われる。

「ラパチャーニの娘」では、至るところで、異なる種類のものが混ざるといふ異種混交の状態が描写される。異種交配された植物をはじめとして、人間と植物の混血であり、東洋の女性のイメージを持つビアトリーチェ、アレキサンダー大王のエピソード、西洋でありながら東洋の雰囲気を持つ町パデュアなどである。これらはまた、異人種間結婚や異人種混交のイメージをもつ。本稿ではまず、作品に見られる異種混交と異人種間結婚のイメージを検討する。その後、*American Notebooks*中のホーソーンのメイン州訪問の記録、伝記などを使い、「ラパチャーニの娘」とアンテベラム期アメリカの人種をめぐる問題との関連を探る。最後に、歴史家の研究を参考にしながら、白人作家ホーソーンの人種意識を考察するとともに、出版以来多くの研究者によって論じられてきた「ラパチャーニの娘」の曖昧さを、ホーソーンの異人種に対する感情と結びつけて考えてみたい。

*本稿は、日本ナサニエル・ホーソーン協会第22回全国大会(2003年5月23日、日本大学文理学部)における口頭発表の内容を書き改めたものである。

I. 「ラパチャーニの娘」に見られる異種混交

「ラパチャーニの娘」には、異種混交のイメージが実に多く出てくる。第一に、庭の植物は、ラパチャーニ博士による異種交配の実験の結果できた混合物である。語り手は、庭の植物を次のように描写する。

Several, also, would have shocked a delicate instinct by an appearance of artificialness, indicating that there had been such commixture, and, as it were, adultery of various vegetable species, that the production was no longer of God's making, but the monstrous offspring of man's depraved fancy, glowing with only an evil mockery of beauty. (10 : 110)⁽¹⁾

ここで、様々な種類の植物を混合した“commixture”は、“adultery”と言い換えられている。“adultery”という言葉は、人間社会での正式な配偶者以外との性的関係を示す言葉である。“adultery”と表現される庭の植物の異種交配に、人間のイメージが重ね合わされている。

次に、異種交配によってできた植物の息で育ち、その姉妹と言われ、作品中繰り返し両者の共通点が指摘されるビアトリーチェを考えてみる。まず彼女は、母親による養育ではなく、父親の、新しい人種をつくる科学の実験によってできた、人間と植物の混血である。作品中ビアトリーチェはまた、東洋の女性のイメージと結びつけられる。例えば、ジョバンニがビアトリーチェと会うことに胸をときめかせている場面で、“[H]is pulses had throbbled with feverish blood, at the improbable idea of an interview with Beatrice, and of standing with her, face to face, in this very garden, basking in the Oriental sunshine of her beauty. . . .” (10 : 109-110) と書かれる。イタリアのラパチャーニ博士の庭で生まれ育ったビアトリーチェは、西洋と東洋両方の血統を暗示する。

ビアトリーチェとジョバンニの関係は、異人種間結婚のイメージをもつ。次の引用は、バリオーニ教授がビアトリーチェに関する警告としてジョバンニに話す、アレキサンダー大王のエピソードである。

(1) Nathaniel Hawthorne, *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*, eds., William Charvat et al. (Columbus: Ohio State UP, 1962-).以下、ホーソーン作品からの引用はすべてこの判に拠り、括弧内に巻、頁数を示す。

It is of an Indian prince, who sent a beautiful woman as a present to Alexander the Great. She was as lovely as the dawn, and gorgeous as the sunset; but what especially distinguished her was a certain rich perfume in her breath—richer than a garden of Persian roses. Alexander, as was natural to a youthful conqueror, fell in love at first sight with this magnificent stranger. But a certain sage physician, happening to be present, discovered a terrible secret in regard to her. . . . That this lovely woman. . . had been nourished with poisons from her birth upward, until her whole nature was so imbued with them, that she herself had become the deadliest poison in existence. (10 : 117)

インドの王子が、アレキサンダー大王への贈り物として、毒をもったインドの美女を贈るというこのエピソードは、ジョバンニとビアトリーチェをめぐるラパチーニの庭の物語とパラレルをなして、アレキサンダー大王はジョバンニ、毒をもったインドの美女はビアトリーチェにあたる。ビアトリーチェが最初にジョバンニに会った時の印象として、ジョバンニは、イタリアというよりギリシャ風の整った顔をしていると書かれている：“. . . rather a Grecian than an Italian head, with fair, regular features, and a glistening of gold among his ringlets. . .” (10 : 104)。この描写は、ジョバンニとマケドニアの王であるアレキサンダー大王との類似を示唆する。Luther Luedtkeは、*Nathaniel Hawthorne and the Romance of the Orient*の中で、アレキサンダー大王の遠征についての史実に注目し、大王は東方での帝国支配を固める手段として、役人たちに、その地方の女性と結婚することを奨励したこと、大王自身、アジアの美女と言われた女性を妻としたことなどを挙げている⁽²⁾。アレキサンダー大王の遠征は、歴史上最初の大規模な異人種混交だったのである。アレキサンダー大王のエピソードとの類似関係を考えると、ジョバンニというギリシャ風の顔つきをし、巻き毛が金色に輝く純粋な西洋人のイメージを持つ男性と、ビアトリーチェという東洋のイメージを持つ女性の結合は、異人種間結婚のイメージをもつとすることができる。

Luedtkeはまた、パデュアの町やラパチーニの庭は、西洋よりも、東洋のイメー

(2) Luther Luedtke, *Nathaniel Hawthorne and the Romance of the Orient* (Bloomington: Indiana UP, 1989), pp. 177-78.

ジを強く持つ場所であることを証明している。パデュアはイタリアの中でも、イスラム教風のドームなどがある東洋風の雰囲気を感じさせる町であり、16世紀のパデュア大学では、アラビアの科学者や哲学者の文献が翻訳され、特に、植物学、動物学、医学、薬学の分野でアラビアの影響が大きかったようである⁽³⁾。さらにLuedtkeは、コーランや中東について書かれた文献に出てくる東洋の宮殿、特に、イスラム教国の婦人室ハレムとラパチーニの庭が類似していることを指摘している⁽⁴⁾。ラパチーニの庭が東洋のイメージを強く持つ場所であるとする、「ラパチーニの娘」という作品は、フランス、アメリカ、イタリア、東洋という4つの場所が交錯する物語だということになる。オーベピーヌという名のフランス人が書いた作品を、語り手ホーソンが英語に訳してアメリカ人読者に紹介するという設定になっていて、作品の舞台となるのは、アメリカからみたら異教のカトリック国イタリアである。作品中にはダンテ、聖書といった西洋の伝統が提示される。さらに、作品で再現されたイタリアには、東洋の要素が多く見出される。

「ラパチーニの娘」では、植物、ビアトリーチェ、ビアトリーチェの毒がうつってしまったジョバンニが“monster”という言葉で表される。例えば、異種交配されてできた植物が“monstrous offspring”（10：110）と書かれたり、ジョバンニがビアトリーチェの身体を、“monstrosity of soul”（10：120）の結果であると言う。また、自分に毒がうつったことを知ったジョバンニがビアトリーチェに、彼女が自分を“a world's wonder of hideous monstrosity”（10：124）にしたのだと言ったり、ビアトリーチェが自分のことを、“such a monster as poor Beatrice”（10：125）と言ったりする。ホーソンは1862年に出版された、“Chiefly about War Matters”の中で、黒人と白人の混合を“monstrous birth”という言葉で表している。最初のピューリタンをアメリカに運んだメイフラワー号が、次の航海でアフリカ系の奴隷をアメリカに運んだという逸話を紹介し、メイフラワー号という一つの子宮から、ピューリタンとアフリカ系奴隷の両方が生まれたことは“monstrous birth”だと言っている。

There is an historical circumstance, known to few, that connects the children of the Puritans with these Africans of Virginia, in a very singular way. They are

(3) Luedtke, p. 173.

(4) Luedtke, pp. 173-75.

our brethren, as being lineal descendants from the May Flower, the fated womb of which, in her first voyage, sent forth a brood of Pilgrims upon Plymouth Rock, and, in a subsequent one, spawned Slaves upon the southern soul;--a monstrous birth. (23 : 420)

「ラパチャーニの娘」では、植物、ビアトリーチェ、毒がうつったジョバンニという異種混交の産物が、ホーソーンが他のところで、異人種混交を表現するときに使った、“monster”という言葉で表現されている。

James Kinney は、19世紀アメリカ文学の中で、異人種間結婚や混血が扱われるときの特徴を挙げている。混血の登場人物はとても魅力的で、特に混血の女性人物の美しさを描写するのに多くのページが割かれること、白人作家や白人登場人物は、混血児の魅力と混血への嫌悪との間のディレンマに陥り、しばしば混血児を死なせることで問題を解決すること、混血、異人種間結婚を扱う場合、アメリカで禁じられたテーマを扱いやすくするために、過去、異国が舞台になることが多いこと、問題となる登場人物は、アメリカ人ではなく、外国人と恋愛することが多いことなどを指摘している⁽⁵⁾。これらの特徴はすべて、「ラパチャーニの娘」の登場人物や設定にあてはまる。

II. ホーソーンのマイン州訪問

「ラパチャーニの娘」出版数年前の1837年夏、ホーソーンは友人ホレーショ・ブリッジを訪ねてマイン州に行く。この滞在中にホーソーンは、ブリッジの家に同居していたショフルという名のドイツ系フランス人から、後に「ラパチャーニの娘」を書くときに自分のペンネームとして使用する、オーベピーヌという名前を与えられる：“He [Schaeffer] has frenchified all our names, calling Bridge Monsieur du Pont, myself M. de l'Aubepine, and himself M. le Berger, and all knights of the round table.” (8 : 46)。

このマイン州滞在の記録は、ホーソーンの*American Notebooks*に残されているが、その部分を読んでいくと、滞在中のホーソーンが、アイルランド人、フランス人、

(5) James Kinney, *Amalgamation!: Race, Sex and Rhetoric in the Nineteenth-Century American Novel* (Westport: Greenwood Press, 1985), pp. 37-42.

先住民といった、アメリカ北東部の白人（ホーソーンは *American Notebooks* で “Yankee” と呼んでいる）以外の人たち、つまりホーソーンにとっての異人種と接触する機会がいかに多かったか、またそういった異人種の生活、異人種同士の交流に驚いた様子がわかる。例えば、ホーソーンが滞在していたブリッジの家の近くにはダムがあって、そこで働くアイルランド人やカナダ人の声が聞こえてくる：

“Irishmen and Canadians are at work on it [a Dam], and the echoes of their hammering, and of their voices, come across the river and up to the window.”

（8：35）。フランス系カナダ人の子どもがホーソーンの家を覗き込んだり、カナダ人の少年が果物を売りに来る：“Some little Canadian children were peeping out between two buildings; they would have talked French, had they been old enough to talk at all.”（8：36）。ホーソーンは、この “Yankeeland” で、子どもがフランス語で取引をするのを聞くのは奇妙だと言っている：“Two small Canadian boys came to our house yesterday, with strawberries to sell. It sounds strange to hear children bargaining in French, in the center of Yankeeland.”（8：44）。ブリッジと散歩をする道には、かつて先住民が通った跡がある：“Bridge says that there was formerly a tradition, that the Indians used to go up this brook, and return, after a brief absence, with large masses of lead. . . .”（8：39）。ホーソーンはまた、ブリッジとともにアイルランド人やカナダ人の住居を訪問する機会もあったようである。そこで、狭い土地に建てられた小屋に多くのアイルランド人やフランス人が住んでいる様子を見たり：“In these huts, less than twenty feet square perhaps, he tells me that upwards of twenty people, male and female, have sometimes been lodged.”

（8：41）、異人種同士、異人種と “Yankee” が口論する様子目撃している：“The intermixture of foreigners sometimes gives rise to quarrels between them and the natives. As we were going to the village, yesterday afternoon, we witnessed the beginning of a quarrel between a Canadian and a Yankee.”（8：44-45）。

このようなホーソーンの本州における異人種との接触の中でも特に興味深いのが、次のアイルランド人の住居の描写である：“. . . the board-built and turf-buttressed hovels of these wild Irish, scattered about as if they had sprung up like mushrooms in the dells and gorges, and along the banks of the river. Mushrooms,

by the bye, spring up where the roots of an old tree are hidden under the ground.”

(8 : 44)。アイルランド人の住居は峡谷や川沿いに乱雑に生えるマッシュルームのようで、元の木の本が土の下に隠れてしまっていてわからないと言っている。ホーソーンは、異人種が暮らす様子を、乱雑に混じり、元の姿がわからなくなったマッシュルームという植物のメタファーで表している。この引用は、「ラパチャーニの娘」で庭の中央にある大理石の噴水の残骸を思い出させる。庭の植物に水分を供給しているこの噴水の残骸は、破片からもとの形を復元することが不可能なまでに壊れてしまっている：“[T]here was the ruin of a marble fountain in the centre, sculptured with rare art, but so woefully shattered that it was impossible to trace the original design from the chaos of remaining fragments.” (10 : 94)。

この他にも、*American Notebooks*中の、メイン州滞在の記録には、ホーソーンが散歩をしたり、小川で水浴びをした時に見た、木や植物の描写がたくさん出てくる。『緋文字』でチリングワースがむしる草、「ヤンググッドマンブラウン」に出てくる森の木など、ホーソーンの中で草や木、植物は特別な意味をもっている。ホーソーンが異人種と接触し、異人種同士、異人種と“Yankee”が交流する場を目撃したメイン州での経験が、後にオーベピーヌというペンネームを使って書くことになった、異人種間結婚のイメージが繰り返し提示され、異種交配された植物が出てくる物語に材料の一つを提供した可能性はないだろうか。

Ⅲ. ホーソーンの人種意識と「ラパチャーニの娘」の曖昧さ

アンテベラム期のアメリカは、奴隷制をめぐる議論、先住民問題、アイルランド系移民の大量移入、西への領土拡張によるメキシコ系の人々との遭遇など、文化的差異が爆発した時代だった。ホーソーンが生活していた北東部に限っても、1830年代、1840年代は、奴隷制、学校での人種分離などをめぐって大激論が交わされ、頻繁に集会が行われ、暴動が起こっていた。特に1830年代、黒人が白人と同じ権利をもつことを危惧した人たちが、黒人と白人の間の異人種間結婚への恐怖をあおる目的で、異人種が交わる場面を描写することが多かったようである⁽⁶⁾。この時代に

(6) Elise Lemire, *Miscegenation: Making Race in America* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2002), pp. 1-4.

はまた、政治的観点だけでなく、進化論的観点からも、人種をめぐるとの論争が激化した。特に1840年代、種の交雑の問題は、異種間の混合が優良な結果をもたらすのか、それとも不毛なのか、という問題をめぐって、議論が交わされていたようだ⁽⁷⁾。Gary B. Nashは、“The Hidden History of Mestizo America”で、アメリカ史の早い段階から、あらゆる地域で、長い間考えられてきたよりずっと多くの異なる人種間の交流や結婚、衝突があったし、人種をめぐるとの問題が絶えず生じていたことを明らかにしている⁽⁸⁾。

ホーソンは、アンテベラム期の人種をめぐるとの問題に避け難く関わっていた。彼が生まれ育ったセイラムは、18世紀末まで、ギニアとの奴隷貿易に従事し、18世紀末以降は、西インド諸島、アフリカ、アメリカ南部などとの三角貿易に力を入れた⁽⁹⁾。セイラムは、アメリカ最初の女性による奴隷制廃止論者の団体ができた場所でもあり、女性の奴隷制反対運動が活発におこなわれていた⁽¹⁰⁾。妻ソフィアのキューバからの手紙には、彼女が滞在中に見た奴隷の生活が記録されているが、ホーソンはそこからも奴隷制について多くを知ったはずである⁽¹¹⁾。また、ホーソンには、義弟ホレス・マン、義姉エリザベス・ピーボディーなど、奴隷制廃止運動に深く関わった人物が身近なところにいた。船長として外国を航海した父の航海日誌も、外国や異人種に対する彼の興味を刺激したはずである。

ホーソンの*American Notebooks*には、異人種についての記録が頻繁に出てくる。その中に、混血について興味深い描写をしている部分がある。次の引用はホーソンが1838年夏にマサチューセッツ州西部に旅行をした時に会った、先住民の先祖をもつ宿屋の主人について書いた文章である。

We have an ostler, with Indian blood in him, and the straight black hair,

(7) Robert Young, *Colonial Desire: Hybridity in Theory, Culture, and Race* (New York: Routledge, 1995), pp. 6-9.

(8) Gary B. Nash, “The Hidden History of Mestizo America,” *The Journal of American History* 82 (1995): 941-64.

(9) Jean Fagan Yellin, “Hawthorne and the Slavery Question,” in *A Historical Guide to Nathaniel Hawthorne*, ed. Larry J. Reynolds (New York: Oxford UP, 2001), p. 136.

(10) Yellin, pp. 139-40, 143-44.

(11) Sophia Hawthorne, *The Cuba Journal, 1833-35*, Ed. Claire Badaracco, Ann Arbor, Mich.: Microfilms International, 1981.

something of the tawny skin, and the quick shining eye of the Indian. He seems reserved; but is not ill-natured when spoken to. There is so much of the white in him, that he gives the impression of belonging to a civilized race—which gives the more strange sensation on discovering that he has a wild lineage.

(8 : 122)

白人と先住民の混血の宿屋の主人は、白人の要素を多く持っているために洗練された印象を与えるが、先住民の血が入っていると思うと奇妙な感じがする、とホーソーンは言っている。さらに次の引用は、ホーソーンがパントマイム見物に行った劇場で見かけた二人の女性についての描写である：“She was not a brunette; and this made her vivacity of expression the more agreeable. Her companion, on the other hand, was so dark that I rather suspected her to have a tinge of African blood.”

(8 : 503)。一人の女性は純粋な白人らしく見えるので、表情が良く感じられるが、もう一人の女性にはアフリカ系の血が入っているのではないかと思う、とホーソーンは書いている。これらの文章は、ホーソーンの異人種への関心を示すとともに、混血、人種混交への不安、曖昧さを示している。

Timothy Powellは、*Ruthless Democracy*の中で、アメリカ・ルネサンスのキャンオンとされてきた白人作家の作品には、異人種に対する曖昧さが見られると言っている。例えば、この時代の作家はしばしば、先住民やアフリカ系に関する題材を自分の作品のアメリカ性を示すのに用いる一方で、異人種の実際の歴史を無視するような作品を書く。それらのテキストには、異文化、異人種への興味、関心と嫌悪、不安が見られる⁽¹²⁾。ホーソーンも、異人種や混血に対して、興味と不安の混じった、ひじょうに複雑な感情を持っていたように思われる。

「ラパチーニの娘」では、ビアトリーチェ、庭、庭の植物、花といった、異種混交、異人種間結婚のイメージを強くもつ人物、物が、曖昧に描かれている。ビアトリーチェは、ひじょうに美しく、輝いているだけでなく、信仰が深く、ジョバンニが危険にさらされないよう気を配り、最後には自分を犠牲にしてジョバンニを救う。物語冒頭でのダンテへの言及により、ビアトリーチェは、ダンテが天に向かう調停

(12) Timothy Powell, *Ruthless Democracy: A Multicultural Interpretation of the American Renaissance* (Princeton: Princeton UP, 2000)

役をした精神性に富んだ清い純真な女性と結びつく。しかし彼女は、その息が即座に昆虫を殺し、接触する男性をみな破壊する、毒を帯びた女性でもある。ビアトリーチェは、後のホーソーンの長編に登場するヘスター、ゼノビア、ミリアムといった、ひじょうに魅力的に描かれているが、複雑さを秘めていて、悲惨な結末に終わる dark lady の原型である。ビアトリーチェの姉妹である庭の植物、花も、美しく、宝石のように輝いているが、強い毒を帯びていて、奇形で、不自然に見える。一つ一つ見れば好ましい植物を混合した結果、不吉な感じを与える混合物になってしまった、とホーソーンは言う：“[Rappaccini] had succeeded in mingling plants individually lovely into a compound possessing the questionable and ominous character that distinguished the whole growth of the garden.” (10：110)。それらは “some crept serpent-like along the ground” (10：95) と蛇のイメージが与えられる。

ラパチャーニ博士、ジョバンニは、これらの異種混交の産物に対して、曖昧な態度をとる。ラパチャーニ博士は驚くほどの熱心さでもって、庭の植物を世話する：

“Nothing could exceed the intentness with which this scientific gardener examined every shrub which grew in his path.” (10：95)。しかし、植物を観察するときの博士は、分厚い手袋とマスクで慎重に自らを保護する。博士と植物の不思議な関係は次のように描写される。

[T]here was no approach to intimacy between himself and these vegetable existences. On the contrary, he avoided their actual touch, or the direct inhaling of their odors, with a caution that impressed Giovanni most disagreeably; for the man's demeanor was that of one walking among malignant influences, such as savage beasts, or deadly snakes, or evil spirits, which, should he allow them one moment of license, would wreak upon him some terrible fatality. (10：96)

ジョバンニのビアトリーチェへの感情も複雑である。それは愛情でもなく恐怖でもなく、その両方であったと描かれる：“a wild offspring of both love and horror that had each parent in it, and burned like one and shivered like the other”

(10：105)。ジョバンニが庭で彼女に初めて会った瞬間から、彼は彼女に対して希

望と恐怖の両方を感じ、その間で引き裂かれている：“hope and dread kept a continual warfare in his breast, alternately vanquishing one another and starting up afresh to renew the contest” (10：105)。

ラパチャーニ博士、ジョバンニは、ビアトリーチェや庭の植物に対して曖昧な態度をとる。語り手は、ビアトリーチェや植物を曖昧に描いている。このような作品の曖昧さには、ホーソーンの異人種、異文化に対する興味と不安の入り混じった、複雑な感情を読み取ることができる。

ホーソーンは「ラパチャーニの娘」の序文で、自分の作品について、次のように説明する：“[H]e generally contents himself with a very slight embroidery of outward manners,— the faintest possible counterfeit of real life,— and endeavors to create an interest by some less obvious peculiarity of the subject.” (10：92)。この文章は、ホーソーン作品は、作者の想像力によってつくられた部分がひじょうに多いものの、それだけではなく、現実と想像が融合している領域であり、作品の中に、作者が創作活動をした時代、場所の社会的現実を読み取ることが可能だということを意味している。

昔のイタリアを舞台にした「ラパチャーニの娘」は、時間的にも空間的にも、作品が書かれた時代のアメリカから引き離されている。しかし、ホーソーンはアメリカについて書かないことが容易ではなかった作家である。様々な資料を参照しながら「ラパチャーニの娘」を読み直すとき、この作品とアンテベラム期アメリカの問題、特に人種をめぐる問題とのつながりが見えてくる。また、異なる種類の物、異なる人種が混じり合う庭の物語に見られる曖昧さは、白人作家ホーソーンがもっていた、異人種に対する複雑な感情を表しているように思われる。